

石見の現状と今後

(浜田ロータリークラブ創立五十周年 記念講演の内容を整理したもの)

平成 21 年 4 月 12 日

ご紹介いただきました溝口です。浜田ロータリークラブ創立 50 周年を心からお慶び申し上げます。

ご紹介にもありましたが、私は、益田の出身でして、益田は石見の西で、石西と言います。浜田が真ん中にありまして石央、江津も石央でございます。大田を石東と呼んでおりますが、子どもの頃は「石西何とか大会」というのがあって、石西はわかるのですが、石央や石東というのはなかなかわかりませんでしたね。

浜田には子どもの頃から時々来る機会がありました。私事になりますが、私の母親が浜田の下府の出身で、唐鐘という「豊が浦」があるところの出身でございます。夏休みになるとそちらの方に長逗留というか、子どもがうるさいので実家に預けられて、いとこ達と下府の海で遊んだ思い出がございます。

浜田には、そのころは汽車で参りますと、一時間以上かかったと思います。浜田駅からは、石見交通のバスに乗って唐鐘まで行くのですが、大体一時間位かかっていました。

それで、ゆらゆらバスに揺られて唐鐘に行っていたのですが、バスに乗る前に浜田の駅前、バスを待っている間、夏ですからかき氷などを母親が食べさせてくれるわけです。皆さんも覚えておいでの方が多いと思いますが、「ピリ軒」というしゃれたレストランがありました。こういう店は益田にはないなあと思いつつながら、おいしいあずき氷を食べるのが楽しみの一つでした。

そういう意味で、子ども心にも、浜田は益田より進んだところだなと思っておりました。ロータリークラブには私の父も入っていたなと思いつつ、調べて見ましたら、益田のロータリークラブは浜田に 2 年遅れてできております。浜田は、石見の兄貴分、ちょうど石見の真ん中にもあって、そういう位置にあったような気がします。中学校も浜田中学校が石見の代表的な中学ですし、女学校も浜田にありました。私の母親も浜田の女学校でした。何となく浜田というのはそういう存在だなあと思っておりました。

浜田市ができましたのが、1940年で、戦前ですね。益田が市になりましたのは1952年で戦後です。江津、大田が市になりましたのが1954年でした。

子どものころは、まだモータリゼーションが進んでおりませんし、道路も悪いわけですから、浜田以東に行くことはなかなか容易ではありませんでした。

私は、高校を卒業して、18歳の時に大学に行くために東京に出まして、平成19年、2年前に知事選に出ることになって島根に戻ったわけでございます。43年振りに、島根県民に戻ったのです。知事になりましたからは、県内をくまなく、多くの現場に出かけまして、各地の皆さんのお話をお聞きしたり、現地の状況なども教えていただいたりして、しょっちゅう県下を回っております。

そうすると、島根はこういうところだったのか、石見というのはこういうところだったのか、あるいは、出雲と比較して石見はこういう感じなんだと、以前より立体的にわかるようになってきたように思います。そういうところから、今の石見論に入っていこうかと思うわけでありまして。

まず、石見の特色についてお話したいと思います。一つは島根もそうですが、石見は非常に広い地域です。東西に非常に長く、平地は海岸部や川筋に所々にあるといった感じで、全体を通して、狭い平地と深い山間地がある地域でございます。海岸部のほとんどは岩場です。「石見」という言葉の語源にはいろいろ説がありますが、一つには岩の海だというのが石見になったという説があります。山が海岸まで迫っているわけですが、こういうところは出雲とは随分違います。私は、現在は松江に住んでおりますので、出雲の風物がよくわかるわけでございます。

田畑修一郎さんという人がいます。益田の出身の人ですが、戦前に浜田中学をでて、早稲田の今の文学部に入られて作家になり、芥川賞候補にもなられた方ですが、この方が昭和18年頃に、「出雲と石見」という本を書いておられます。最近、復刻されまして、松江のハーベスト書房からでていますが、その中にこんな文章があります。

「同じ島根県であったが、出雲と石見との自然の境界をなしている三瓶山の

主脈が海までせりだして、押し出している山地帯を越えると、景色は一変する。中海、宍道湖、斐川平野にかけて、広い打ち開いた伸びやかな地勢は、急にごたごたした山地になるのだ」とあります。それから、「この山地帯は石見全部に渡っているので古来、石見三田と言われるのでわかるように、東に大田、中部に浜田、西に益田と、この三カ所、」（田というのは広い平地があるという意味なのでしょう。）「平地があるにすぎない。都野津付近に少し平地があるが、大半は砂地で、浜田は町が広がったので余地はほとんどない。」田になる余地はほとんどないという意味でしょう。「そうしてみると、平地らしいのは大田と益田くらいだ」というようなことを、田畑修一郎さんが書いておられます。この本は出雲のことも石見のことも書いてありまして、戦前に書かれた本ですが、今読んでも面白い本ですので、機会があったら、是非御覧下さい。

しかし、石見という地域は非常に広いんですね。ですが、その広いところが大きな河川で分断をされているわけです。西の方は益田の高津川、益田川、浜田にあります三隅川、周布川、浜田川、江津には江川という大きな川がございまして、大田には静間川という大きな川がございます。

面積をみてみますと、島根県全体も東西に長くて広い県で、6,700平方キロありますが、そのうち出雲が2,782平方キロ、石見が3,579平方キロです。この3,579平方キロがどれくらいの大きさかということ、大体、東京の1.6倍位になるわけです。東京よりも石見の方が1.6倍位大きいということですね。それから、大阪府よりも大きく、大阪府の2倍くらいです。

それから益田市は合併により、県内で最も大きい市になりまして773平方キロあります。これは東京23区よりも広いんですね。東京23区は617平方キロですから、浜田市も東京23区より広く、689平方キロです。益田が島根の中でもっとも広い市で、次に浜田ということになります。

東京の真ん中の皇居、丸の内、さらに新宿、上野、杉並なども全部、益田市とか浜田市とかに入るわけです。東京23区ということ、多分人口は1000万人近くになるでしょうが、益田市では5万少し、浜田市では6万少し。この地はそういう意味で人口が散漫にあるということですが、それはこの地が平地が少ない事と関連しているわけです。そういうところが一つの特色です。

それから、山や川が多く、交通網の整備が遅れていた地帯です。鉄道もそう

ですし、高速道路も山陰道が早く完成するように努力をしておりますが、そういうものが遅れたわけです。つまり、地形的な理由から、交通網の発達が遅れ、大都市と時間的に遠かったというのがこの地域のもう一つの特色です。これは石見だけに限らず、島根全体がそうであります。

知事になりまして、「何故、島根という地域が、他の地域と比べて発展が遅れたのだろうか」と考えることがよくありますが、こうした地形的な理由が大きな影響を及ぼしているということに気づくわけです。過去には、こういうものが発展にとって大きな障害であったということです。

石見を見ますと、これは出雲部と少し違うところは、近世において、特に江戸時代ですね、地域としての一体感が希薄だという点です。出雲は古代から出雲神話があり、出雲の風土記があり、一つの文化を共有した一体感というのが昔からずっとあるわけです。これは、やはり、石見は地形が細かく分断されていることが影響したと思います。

特に、江戸時代が日本文化の形成に大きな役割を果たすわけですが、島根は、東には石見銀山を中心に天領、いわゆる幕府の直轄領がありました。江の川の東まで天領でした。西は高津川の西、益田市の西の方は津和野藩ですし、浜田に浜田藩がありますが、弥栄村、金城等々は津和野藩でもあったわけです。益田の近くの日原なども鉱山があり、天領でした。江戸の300年位の間に通の文化とかが各地で芽生えるわけですが、そういうものがやや形成し難かったという面があるかと思えます。

しかし、一体感の形成は遅れたけれども、むしろ各地域にいいものが沢山残るといった結果になったという気がするわけでごさいます。一つは、各地域に自然がよく残っております。川も綺麗です。高津川は、最近、水質、水のきれいさで日本一になっておりますし、各地に伝統的な文化が残っております。石州和紙ですとか、石見瓦ですとか、そういう工芸品なども各地にあります。石見神楽も、各地域にそれぞれ伝わっております。

石見では、発展が遅れたために、人々は域外に職場を求めて出るといったことが随分続いてまいりました。そのために、石見からは、県外で活躍する人を随分と輩出していると思うわけであります。

また、石見からは、特色ある企業家が随分出ているような気がいたします。それから、各地に豊かな地域活動がございます。温かい地域社会が良く残っているということです。こうしたことは島根全般について、他の県と比べるとと言えることではございますが、島根の中でも、石見はその傾向が強いといえるのだろうと思います。

これが、島根の特色ですが、数字で見ますと、島根県の人口のピークが昭和30年（1955年）で、当時は92万人です。それが今では、72万5千人位になっています。50年の間に20万人位、人口が減ってきているということです。50年に20万人ですと、年間4千人位ですから、なだらかに減っているということです。一挙に減ったわけではありませんから、急激なショックがあったわけではありませんが、そういう傾向が続いております。

石見を見ますと、昭和30年（1955年）のピーク時が、37万5千人です。それが、最近では21万4千人となっており、50年間に16万人くらい減っております。減り方がかなり大きいわけですね。若い人が都市に出ていって、残る人の人口では、高齢者（65歳以上）の割合が高くなっております。1955年頃は高齢者の割合は8%位です。それが今は、33%位になっているということです。

製造業の出荷額をとってみましても、石見の工業生産は、平成2年頃まで県内に占める工業生産は3割くらいでしたが、今は20%位に減っております

他方で、観光客（入り込み客数）を見ますと、県全体では、2003年に2500万人位の観光客が、県内の観光施設に來られたという数字がありますが、昨年（2008年）は2,870万人ということで、かなり増えています。石見銀山の効果や出雲大社の遷宮、松江開府400年といった行事や、浜田の地におきましては、アクアスに來られる人も非常に増えているわけですね。全体的に観光客は増えているということです。

総括してみますと、なだらかに、地形的な理由などいろいろな理由から、人口減少、若い人の都市への流出が続いており、この大勢がなかなか変わらなかったということです。では、この動きはこのまま続くのかということが、次の問題になるわけですが、そうでない新しい動きも見え始めているというのが私の見方でございます。

一つは、交通が不便であったことが発展の大きな障害だったわけですが、高速道路が、徐々にではありますが整備が進んでおります。平成20年代末くらいまでには今の山陰道も完成するだろうとみられますし、国道なども中山間地域でもかなり、良くなってきています。かつては、益田の方では、益田市内から匹見に入るのに半日もかかったわけですが、最近では一時間くらいで時間的な距離が短くなっております。そういう意味でかつての障害が徐々に低くなっているということでございます。

それから、企業の立地などにつきましても、各市町村や県が、都市の企業に島根への立地を求めているような活動をしておりますが、都市の企業の方も島根などへの立地に関する関心を高めてきているのを非常に感じるわけでございます。

昨年の秋以来の世界的な景気後退に伴い、立地に対しても大きな影響が生じていますが、長い目で見ますと、大都市周辺では工場立地が大変難しくなってきております。大都市では、工場近くまで住宅地が迫っておりますから、拡張しようにもできない状況があります。

もう一つは、やはり日本のものづくり産業は働く人々の経験に支えられているということがあります。熟練した人の手に蓄積された技術によって、日本の物づくりは支えられております。単にコンピュータや機械のみで、いいものができているのではなく、強いものづくり企業を維持するためには、長く同じ企業で、真面目に働いて経験を蓄積する人が必要であります。

そういう人を都市で求めることがなかなか難しくなってきております。特殊な優秀な技術を持っている中堅、中小企業が日本には沢山ありますが、そういう企業の経営者に聞きますと、そうした人材を都市で求めるのは、非常に難しいと言われます。都市では、優秀な人材は大企業が雇用してしまい、そうすると中堅中小、あるいは部品をつくるような企業は、地方への立地を求めるようになり、大都市からの分散が始まっているわけです。

九州や東北などにも自動車の部品工場が広がっておりますが、島根でもそうした企業が少しずつ広がっております。出雲部を見ますと、金属加工や鋳物業の集積があり、トヨタに部品を納めているような企業もあります。この近くに

は江津の工業団地にもあり、そういう人を求めて立地する企業もかなりあるわけです。こういう傾向は今後も続くと思われます。むしろ島根はこれまで活用できていなかったのもあって、活用できるような状況になったから立地をするという企業がでてきており、これは新しい動きであります。

それから、人々の考え方や生活の仕方が日本の中でも変わってきています。難しい言葉で言うと「価値観の変化」ということになりますが、生活の豊かさが、単に、物質的な豊かさだけではなく、自然の中でゆったり生活するとか、あるいは子供達と一緒に暮らすことができるとか、あるいは通勤に時間のかからない場所に住みたいとか、自然の食品を求めるとか、そういうものの方が大事だと考える人々が非常に増えているわけでございます。

その一つの例として、最近Uターン、Iターンという言葉がありますが、Iターンの人達がかかなり増えております。都市に住んでいて、都市の生活ではなかなか満足を得られない、農業をやってみたいとか、水産業で働いてみたいということで、そういう人が都市からいきなり島根県に来られる例がかかなり増えております。

隠岐の海士町は人口3千人程度の小さな町ですが、ここ数年の間に、都市から100数十人の人達に移り住んでおられます。また、隠岐の西の島町は漁業で有名なところで、置き網の船団がかかなりあるのですが、200人くらいその漁業に携わっておられる中で、30人くらいは都市から来た人です。その人達は海が好きなんですね。都市の近辺で海で泳いだり、いろいろしておられて、海に近いところや船で仕事をしたいといったような人が30人も来られるなどという事が起こっているわけです。

林業などもそうです。なかなか林業の場で働く人達がいなくて困っているのですが、山の好きな人達はそういう仕事ができるところで働きたいと考えておられるわけです。

かつては地方から都市へ出て大企業で働く、大きな会社で働くということで、地方から都市へのIターン一辺倒であったわけですが、今は、都市から地方に対するIターンが起こり始めているわけです。こういうことは、歴史上あまりなかったことですが、こういう事は今後も続くだろうと思ひます。

それから、Uターンもそうですね。多くの県出身の方が都市に出て、働いておられますが、島根でいい職場があれば帰りたいという人が沢山おられるわけで、定住財団や市町村が出身の方々に、そうした情報を送るといようなことを随分やっております、それをきっかけに帰ってこられた人もおられます。

つまり、真面目に粘り強く働く人達の供給源として、島根県だけではなくて、島根県の外にもおられるということです。そういう人達が活躍できる場を提供することによって、島根らしい発展が可能な時期になってきたということです。

それから、もう一つ大きな変化は、やはり情報技術の変化ですね。昔は情報源というのは、テレビやラジオ、新聞くらいでしたが、いまはご承知のようにインターネットが発達してまいりましたから、地方にいても都市の情報がいくらでもとれるというようになりました。外国の情報もとれるということになりました。そういう意味で情報の格差というものが、ほとんど都市で暮らそうと、地方で生活しようとほとんど変わらない時代になったわけでございます。

インターネットでする仕事というのはどこでもできる時代になり、それは職場の選択の可能性を非常に大きくしております。インターネットやソフトを制作する人達は、むしろ自然が豊かで、静かなところでそういう創造的な仕事をしたいというような人が増えておまして、そういう仕事が、大都市ではなくて、地方でもできる時代になっているということです。

世の中の技術の変化や道路整備の進行、あるいは人々の価値観の変化等により、地方が持つ魅力が増しているように思うわけです。過去は一方向的に大都市のものがいいということだったわけですが、そういう世界がだんだん変わりつつあるということです。

それは何を意味するかというと、島根のような、むしろ発展が遅れたけれどもいいものが残っている、文化が残っている、伝統が残っている、豊かな自然がある、豊かな山林がある、きれいな水がある、豊かな食材がある、真面目で働く人達がいる、温かい地域社会がある、そういうものが価値をどんどん増しているわけです。

従いまして、私どもはそうしたいいものを活用することによって島根らしい発展を目指していく、これが、我々に課せられた一つの大きな課題であると考

えるわけでございます。

そういう目で見ますと、各地にそういう地域資源とありますが、地域、地域でいいものが沢山ありますので、そういうものを新たに掘り起こし、新たな仕組みの中で活用するといったようなことが考えられるわけでございます。

石見銀山というのが世界遺産に一昨年登録されましたが、私どもも、石見銀山があるということは子どもの頃、知ってはおりましたが、それがそんな価値があるものだという事は、広く知られてはいなかったわけです。が、大森町に住む人達が、その価値をお父さんの代、おじいさんの代から聞いておられて、それを世の中の人に知ってもらいたいということで、大森の町を整備され、市当局も残された坑道を整備するとか、発掘をするとか、そういうようなことをされて、その結果が世界遺産登録につながりました。今や、全国から人が来るよう状況になったわけで、これは一つの典型例ですが、それと似たようなことが、いろんな形でできるだろうと思うわけでございます。

農業の分野では、いろいろ流行っておりますのが、地域の方々が自分でつくった野菜を持ち寄って、それを道の駅やスーパーなどで販売するという取り組みです。そこでは、誰がつくったか、ちゃんと野菜に書いてあります。そうした野菜などを求めて、遠くから、あるいは近隣から多くの人々が来られます。これも、普段から食べているものを商品に仕立てているわけです。

あるいは江川の入ったところにある美郷町では、猪が沢山でて困っておられます。猪を町が捕獲してますが、その猪を使って猪鍋を作って販売するとか、そういうことが行われています。

また、これも江津の近くですが、昔から桑茶というのがありましたが、その桑茶を我々が飲めるように製品に仕立て上げられて、商品として売り出されております。

浜田では、今ではとても有名なノドグロですが、昔はそんなに注目されたわけではありませんでした。それがいろんな宣伝などを通じて都市の人に知られるようになって、高級魚になったわけです。

浜田のドンちっちの、宇津市長がこちらにおられますが、アジなどもブラン

ド化して、高く売れる時代になってきたわけです。

そういう意味で我々の周辺を見渡しますと、そうした素材が沢山あるわけです。この近くですと温泉が沢山ありますね。それも昔風の温泉にちょっと手を加えて高級な温泉の宿を造られると、そこに高い値段を出されても泊まりに来られる方が増えるような時代になったわけです。つまり、知恵と工夫をすることによって、いろんなチャンスを見いだすことができる時代になったわけでございます。

島根県内をみますと、そうした動きが沢山出てきております。今年の3月には、益田の企業が二つ表彰されております。一つは、経済産業省が、全国のサービス産業で300社くらい、いいものを表彰するというのをやっています。まだ始まって2～3年ですので、まだ100社位しか表彰されておりましたが、3月に、益田の自動車学校が表彰されました。MDS（益田ドライビングスクール）といいます、石見交通の関係の小河さんがしておられます。私もそこで免許をとったのですが、昔は今のようないドライビングスクールではなく、普通のドライビングスクールだったわけですが、場所を変えられて、全国から運転免許を取る人を招くようなビジネスを始められたわけです。

大体、年間6千人くらいの卒業生を出されているそうです。そのうち県内から来ている人は、2004年で3%位で、あとはみな県外からの人です。関東からも随分来ておられるそうです。遠くから来る人は、石見空港を使って来られるそうです。他の地域ですと新幹線で広島まで、広島からバスでこられます。寄宿舍がありまして、寄宿舍に泊まって、2週間位で運転免許が取れるような仕組みになっているわけでございます。

そこで免許を取るために来ている人達はみんな挨拶をすとかですね、また空き時間に掃除をしたり、その中だけで使える紙幣をくれて、食事代やショップでの買い物に使ったりできる。いろんな形で、若い人達が感動するようなスクールに仕立てられて、卒業生達が帰ってから、自分の知人だとか後輩達に、免許が取りたいと言うことになったらあそこがいいよと口コミで伝えて、それをきっかけに来るようになってきているわけですね。

つまり、運転免許をとる学校などどこにでもありますし、どこに行ってもいいのですが、工夫することによって、全国から人を呼ぶということが可

能になったのです。あの不便な益田まで来られるわけです。

もう一つは、これも益田です。ご承知だろうと思いますが、松永牧場というのがございます。松永さんという方がやっておられますが、お父さんの代から肉牛を育てておられて、今の松永さんは兄弟でやっておられます。お兄さんの方は以前、都市で金融機関に勤めておられましたが帰られて、弟さんが技術、飼育を担当、お兄さんが販売を担当されています。1973年にお父さんの牧場を引き継がれたときは180頭くらいだったそうです。それが今では6千頭を超える規模で、日本でも有数の牧場となっております。三隅に近い、益田の郊外の多根というところで、73年からですから、30数年の間に仕上げられたわけでありまして。いろんな工夫をされたんだと思いますが、そういうことが可能になる訳であります。

島根県内を回りますと、いろんな工夫をして、ビジネスを興しておられる例をよく見ます。私は県内を回りますが、大体、私の部下の人達が、是非、そういうところを見に行ってくれと言うんで、そういうところを大体、計画に入れてくれるのです。例えば、出雲の奥出雲の山の中で温室でトマトを作っている方がおられます。それは非常に糖度の高いトマトなんですね。それが非常に高く売れております。

あるいはジーンズ、Gパンの加工ですね。ちょっと、使い込んだ感じにするんですね。もともとクリーニングをやっていた方が、そうした技術を活用してGパンの加工を始められまして、それがブランド化され、都市に売れるものを作られ、中国にも工場をお作りになるような人もおられます。

かつては、ビジネスというと、大きな敷地や工場が必要で、そういうものでないと本当の儲かるビジネスがなさそうに思いましたが、世の中が、随分変わってきたということです。少量であっても人と違うものを作れば、それがビジネスとして可能になる時代になったのです。それから、交通の便もよくなりますから、搬送が容易になってきているのです。

さらに、昔は地方と大都市と情報の格差は大きかったのですが、今ではいろんな情報がどこにいてもとれる時代になりますから、流行が地方にいてもわかる、消費者の選好、好みの違いなどもわかるような時代になります。

工夫をされる方を見ますと、いろんな先進地域に行って勉強したり経験して、それを自分のものにして、新しいことに挑戦されているというケースが随分あるように思います。乳業では、木次の佐藤乳業の佐藤さんという方が、低温による殺菌をやっておられますが、この方の牛乳などは、東京の超一流のスーパーなどでも愛好されております。つまり、活用できる素材が、我々の周辺にある時代になったわけです。

県も、そういう新しい、都市の人達が買って下さるようなものを開発する、そういう方々を支援する努力をしています。それから、そういうものを大都市のマーケットに紹介するというようなこともやっております。あるいは、東京や大阪の大手スーパーや高級スーパーなどとも契約、協定を結んで、そういう商品を置いてもらうようなこともしています。

それから、都市からも、立地を求めて島根に来られるところがかなりあります。江津の工業団地などにもかなり来ておられますし、また進出したいという希望などもあります。益田の工業団地にも関心を持ってくださる方もおられるわけでございまして、県としてはそういう努力を更にすすめていきたいと考えております。

それから、大きな変化としては、国際情勢が変わってきているということです。北東アジアと言いますが、浜田港も近隣のウラジオストックや韓国、中国等がマーケットの中に入ってまいりました。たまたま、ウラジオストックとの関係におきましては、自動車の輸出がロシアの政策の変更によりまして、ちょっと影響を受けておりますが、ご承知のようにLBIの高橋さんが中古自動車の輸出ビジネスを浜田の地で打ち立てられたわけでございます。

その船に今度は、コンテナを乗せて、浜田港に集まる物資をロシアに運ぶという新しいビジネスも始まりました。残念ながら自動車の輸出の関係でそれにも影響がでておりますが、そういうことも行われております。

こうした貿易を通じて、島根の物品ですね、例えば石州瓦をやや洋風にしたものをロシアに、ウラジオストックを通じて輸出していくとか、島根の野菜を輸出するといった取り組みも可能になるわけです。

私も、去年の7月に、高橋さんたちと一緒にウラジオストックに参りました。

浜田では、岩谷さんがベビー服をウラジオストックの商店に卸されるというビジネスを始められておりますけれども、新しい動きも出てきているわけがございます。こういう動きも、県として支援していこうとしております。

それから、世の中の変化ということと言えますと、地球温暖化が人々のいわば常識のようなことになっております。昔は、地球温暖化といっても遠い先のことだろうと思っておりましたが、我々の生活にも大きな影響を及ぼしうることが認識され、それとの関連で、森林の重要性が多くの人に理解をされ始めております。島根は森林が非常に豊かなところです。国の政策なども森林の整備にも力を入れていこうという時代になっております。

それから、木材の供給などにつきましても、中国などの新興国が発展することによって、国際的な木材需給が引き締まってきておりました、県産材の価格なども少しずつ上がり始めているということになりますと、県産材の活用の余地が増えるわけがございます。県もそうした県産材の活用などを支援するようなことをやっております。

そういう中で、この地では、石州瓦が、近年大きな影響を受けているのですが、県としても、地域の資源でありますから、これがうまく活用されるように、石州瓦を利用した住宅の建設などに補助を行うようなこともやっております。こうした地域の資源がいろんな形で活用されるように、我々も努力をしていかないといけないというような状況でございます。

それから、この浜田の地では、県立大学が非常に大きな役割を果たしております。学生さんがいること自体が大きな価値でございますし、また、学生の方々が地域の活動に溶けこんで、地域の活動を刺激されるというようなことも起こっております。

弥栄村では学生がそういうショップの手伝い、農産物を販売の手伝いをされていることもありますし、最近では、石見銀山ブランドを起こすということで大森町の群言堂の松場さんなどと一緒に、新たなブランドを作り出す作業などにも参加されています。

また、旭町の島根社会復帰促進センターも、財政的には県、浜田市にも大きなプラスの効果がございますし、この活動もこの地域に大きな刺激を与えてく

れると思うわけでございます。

以上のような意味におきまして、これまで大きなハンディがあった石見の地、あるいは島根全体におきまして、そういうハンディが少しずつ少なくなっているという時代を迎えています。我々はそういうチャンスを活かしていく、粘り強くそういうチャンスを活かすように努力していく。これが今、我々に求められている大事なことであると思うのです。

観光のこともございますね。観光につきましても、例えばアクアスがありますし、各地域に豊かな食材がございます。そういうものを、観光に来られた方に召し上がっていただくということも大きな魅力です。そういうものをできるだけ促進するように努力して参りたいと思いますし、それぞれの皆様のビジネスにおいてもそういうことを進めていただきたいと思いますと思うわけです。

石見の地におきましては、「懐かしの国」ということで石見全体のイメージを膨らますように、協働した活動も進められておりますが、そういう地域、地域の活動が、さらに進むように、市町村、県、あるいは商工会議所、観光協会が一緒になって努力をして参りたいと考えているところでございます。

我々の生活というのは、やはり、我々を取り巻く環境に大きく左右されるということは間違いのないことですが、それも、技術の進歩や人々の考え方の変化によって変わってまいります。いつまでも同じわけではないのです。それはまた、国の政策によっても影響をされるものであります。例えば、道路の整備などはやはり、国の政策がどうなるかということに影響を受けるわけです。これまでは、発展をしたところから、自動車が多く走るところから整備が進んできましたが、だんだん島根のようなところにも整備の順番がまわってきたわけでございます。そういう時代を迎えているのです。

あるいは、農業などでも、国の政策が変わることによって地域の生活も変わります。水産業も同じです。水産資源を大事にしないといかんという考えも少しずつ広がってきております。浜田港でいえば、日本海において魚礁を充実させる、これも国に対して要望するわけですが、そういうことも進んでいくでしょう。

それから、農業は水田の問題、難しい問題がありますが、国の生産調整など、

稲作の調整の問題、これがどうなるかによって大きな影響を受けるわけですが、米以外の分野でも工夫することによって、都市の人々に喜ばれる商品を開拓していくことが可能です。

県内では多伎のいちじくがかなり成功した例ですが、浜田の地にも蓬莱種のいちじくがあり、地域の方々が一緒になって努力をされますと、またそれが都市でも喜ばれることが可能になると思います。

そういうことで、石見もいろいろ難しい問題がございますが、新しい動きもでてきておりますから、そういう新しい動きを活用することで石見らしい発展が可能になりますし、県としてもそうした地域、地域における努力を一生懸命支援して参りたいと思いますので、是非とも、一緒に頑張ってみましょう。

「石見の現状と今後」ということがございますが、そういう方向に向けて努力をすることによって、石見が住みやすいところ、若い人達がこの地に残って働ける場所にしたいと思いますので、よろしく願いいたしまして、私の話を終わりたいと思います。